

1783 年天明浅間山噴火

有史以来、浅間山の噴火は数十回記録されています。その中で、とくに大きかったのは1783年(天明3年)の噴火で、地元では「浅間焼け」とか「浅間押し」と呼ばれています。旧暦4月9日(現在の5月9日)から時折噴煙を上げる小規模な噴火が始まり、次第に頻度とマグマの噴出量を増し、およそ3か月の活動期間後に、激しいプリニー式噴火と火砕流が繰り返し発生するようになりました。7月8日(現在の8月5日)午前、大音響とともに爆発が起き、火砕流「鎌原火砕流／岩屑なだれ」が北麓に流下して鎌原村を埋没させ、477名が犠牲となりました。現在、浅間山の観光名所になっている「鬼押出溶岩」は、このとき形成されました。破局的な「流れ」はさらに吾妻川になだれ込み「天明泥流」を引き起こしました。泥流は、利根川に合流して関東平野を流れ、銚子(太平洋)と江戸(東京湾)に達し、関東平野の広い範囲で、家屋の流出、田畑への泥の流入など甚大な被害が発生しました。火砕流・泥流による群馬県内の死亡者は1400人以上といわれています。

一方、上空高く成層圏まで大量に噴き上げられた噴石(軽石)や火山灰は、広範囲に降下火砕物として降り注ぎ、農作物などに大きな被害が出たほか、軽井沢宿や坂本宿(群馬県安中市)では家屋の焼失や倒壊があり、中山道も寸断されました。

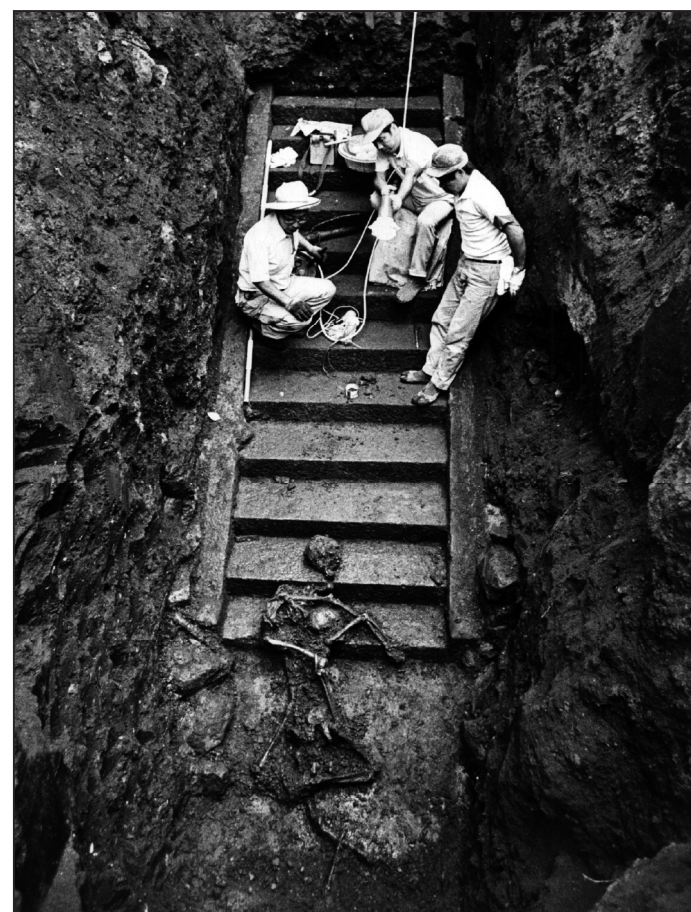


信州浅間山焼亡之図絵図(部分拡大)

埼玉県立文書館所蔵 野中家文書

■鎌原村の発掘調査

「鎌原火砕流／岩屑なだれ」に埋没した鎌原村では、1970年代の終わりから80年代にかけて発掘調査が行われました。石段を駆け上がり観音堂にたどりついた者がかろうじて「土石なだれ」から逃れることができたと伝わる鎌原観音堂の石段や、十日ノ窪の埋没家屋、「幻の寺」とされた延命寺の所在と埋没の状況などが確認されました。堆積物に埋まった観音堂の石段下からは犠牲となった遺体が発見されました。

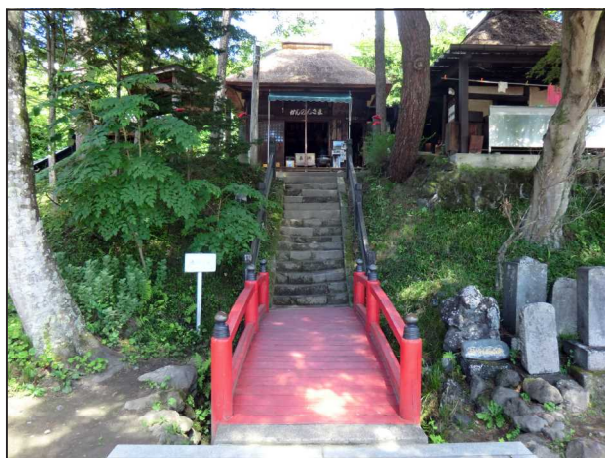


観音堂石段下の遭難者(写真: 嬬恋郷土資料館提供)

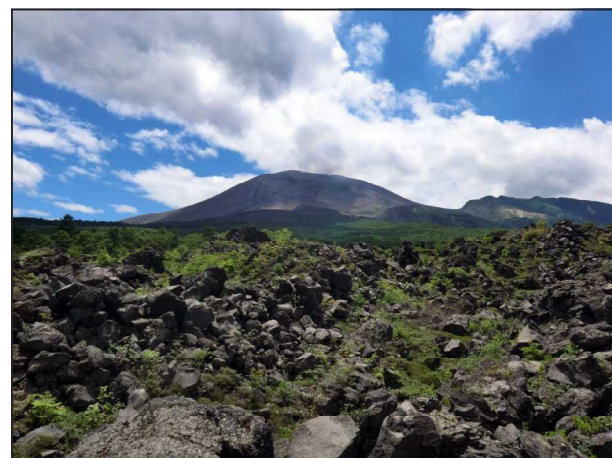
建築用材や生活用品、遺体の頭髪などが全く焼け焦げていなかったことから、鎌原村を埋め尽くしたものが、高温の火砕流堆積物ではなく、溶岩片の力で削られた「常温で乾燥した」地表の岩屑だったことが判明しています。

鎌原村の被災の状況とその発掘のさまは、「日本のポンペイ遺跡」とたとえられています。

※ポンペイ遺跡: 西暦79年のヴェスヴィオ火山の噴火で軽石に埋まったイタリアの南部の古代都市遺跡。



現在の鎌原観音堂(2015年7月撮影)



鬼押出溶岩と浅間山(2015年7月撮影)

浅間山は、噴火警戒レベルが「2」火口周辺規制(火口からおおむね2キロメートルの範囲に影響を及ぼす噴火の可能性)」に引き上げられています(2015年6月11日)。

国土地理院では、2015年7月22日「REGMOS(GNSS火山変動リモート観測装置)」を嬬恋村鎌原に設置し、2004年に群馬県長野原町に設置したものと合わせて観測を続けています。



浅間山

2568m

浅間山は、群馬県と長野県の県境に位置する日本を代表する火山のひとつで、現在も活発な活動が続いています。山麓を南から西に千曲川が流れ、北麓の吾妻川は東に流れて利根川に合流します。

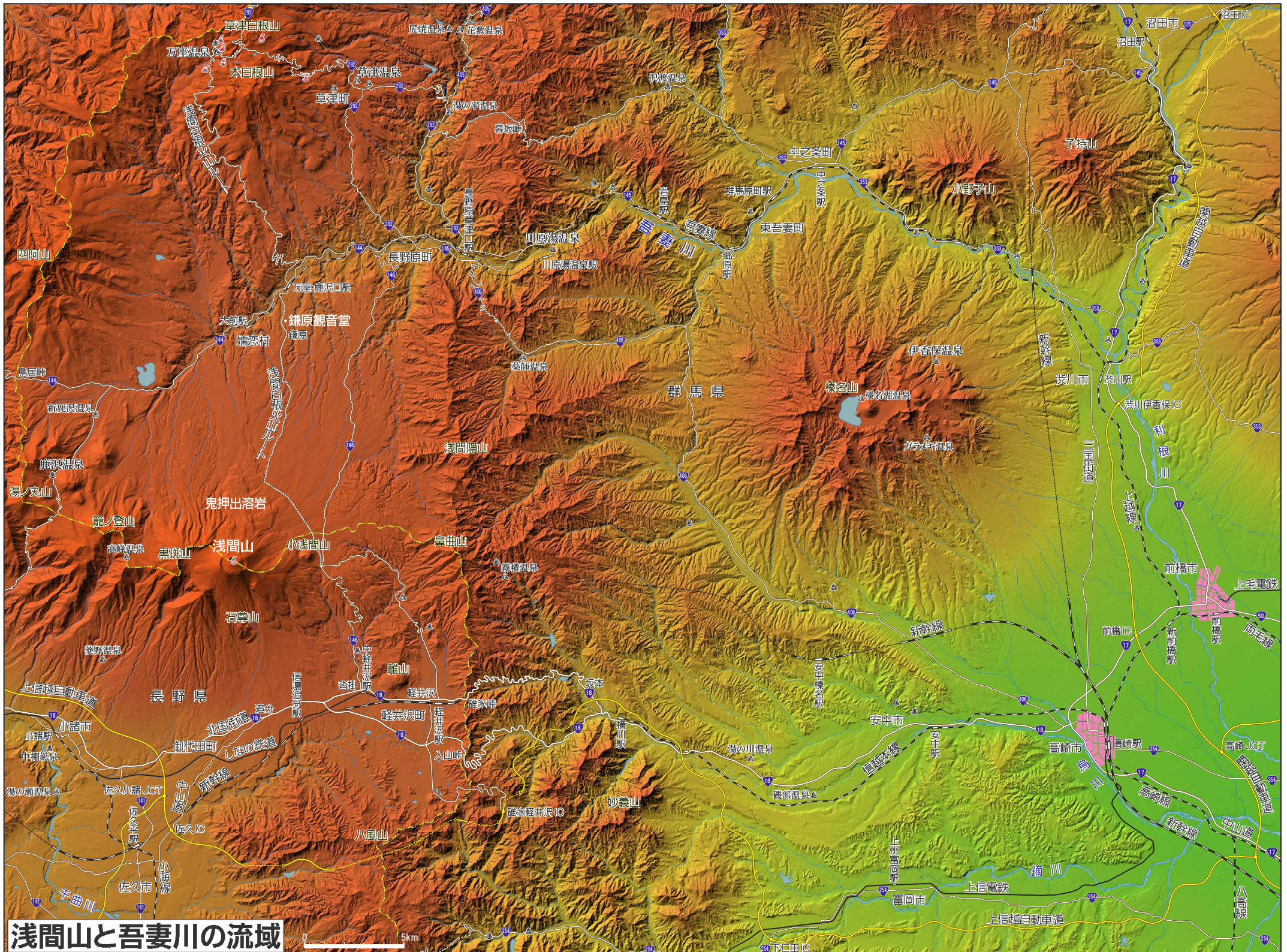
むかしから中山道（古くは東山道）を行き来する人々は、絶え間なく立ち昇る噴煙を仰ぎつつ、碓氷峠を越えました。上信越高原国立公園に指定された浅間山とその周辺は、多くの文学作品の舞台や絵画のモチーフとして親しまれており、日本初の避暑地となった軽井沢をはじめ、山麓はリゾート地として賑わっています。



2015年7月撮影



2010年11月撮影



浅間山と吾妻川の流域